新しい医学図書館づくり

—独協医科大学の場合—

徳村 泰弘*

はじめに

学校法人独協学園独協医科大学は、昭和47年7月に文部省の設置認可を得、昭和48年4月、医科単科大学として開校する運びに至った。

独協学園と医科との結びつきはきわめて密接である。その前身である独逸学協会として明治14年(1881)に創立されて以来、独協学園は旧制の独逸学協会中学校、新制の独協中学・高校において、また昭和39年設立の独協大学においても、優れたドイツの学術文化を教育の場を導入し、特色ある教育をおこなってきた。この特色ゆえに、特にドイツ医学が隆盛を誇った戦前においては、通称、独協には医学界を志す学生が多く、卒業生から幾多の著名な医学者や医師が輩出した。生化学者で文化勲章受賞の佐々木隆興、薬理学者で学士院賞受賞の田村憲造、東大名誉教授、東大教授で劇作家としても活躍した木下杢太郎、内科学の呉建、精神神経学の内村祐之両東大名誉教授、寄生虫学の森薫阪大名誉教授など、独協の卒業生には医学界で指導的な役割を果たした人は多い。

このように、医学界との強い結びつきをもつ独協学園の歴史と伝統から、独協医科大学の設立は、同窓生をはじめ、学園関係者の多年の念願であった。昭和45年5月独協学園理事会は学園創立88周年を迎えるにあたって、医科大学の設立を正式に決議し、3ヶ年近くの年月にわたる設立準備活動を経て、ここに独協医科大学が誕生することになった。

筆者は、昭和47年6月から独協医科大学設立準備室に勤務し、新しい医科大学の図書館づくりにたずさわっている。しかし、独協医科大学図書館は建設の途上にあ

り、現在は、図書資料、職員、施設、活動など、すべての面でまだ不十分である。事実、図書館の運営方針をはじめ、その組織、機構のあり方は、いまだに検討の段階にある。図書館施設の面でも、現在はゼミナール室を改造した室を臨時的図書館として使用しており、昭和49年3月竣工を予定している図書館の建築設計に着手したところである。また、本学の開校は約3ヶ月後のことであり、図書館の利用者もいないので、対外的には、図書館はまったく機能していないといつてよい。

このような現状から、「新しい医学図書館づくり」の事例報告に、本学図書館をとりあげるのは時期尚早であり、当をえていないと考えるが、編集者の了解を得て、以下、独協医科大学図書館の現状と当面の課題を紹介することにしたい。

I. 図書館の設立準備

昭和45年5月、独協学園理事会は医科大学の設立を決議すると同時に、学園理事をメンバーとする医学部設置準備委員会(のち独協医科大学設立実行委員会と改称)を発足させ、医科大学設立への具体的な活動を開始した。しかし図書館の設立準備に本格的にとりくむようになったのは、この時から約1年ものちのことである。昭和46年6月、独協医科大学図書館設立準備委員会を設置し、その第1回委員会を開催するに至って、はじめて図書館づくりに着手したことになる、といえよう。

この委員会は、医学部設置準備委員会の専門部会的な性格をもつもので、委員長には独協学園理事が、委員として、独協大学総務部長、同大学図書館事務長、同大学図書館学担当教員及び本学赴任予定の教授の4名が指名された。この委員会の構成メンバーでみる通り、本学が

* Yasuhiro, TOKUMURA 独協医科大学図書館

図書館づくりをはじめると非常に恵まれていたことの一つは、独協大学という母体があったため、同大学の図書館学担当教員や図書館事務長といった図書館専門家の協力を得ることができたことである。

委員会の設置当時には、図書館専任の職員は 1 人もおかれていなかった。したがって、この委員会は、図書館設立に必要な政策や方針を策定する機関であると同時に図書資料の選択、発注、整理など、図書館の実務にもたずさわっていた。このような状況の中で、図書館設立準備委員会の中心メンバーとして、また図書館の実務の責任者として、本学図書館の基礎づくりに貢献されたのは、独協大学図書館学担当の今まど子助教授である。今助教授は、本務のかたわら、新しい医科大学図書館の設立準備計画から図書資料の収集、目録・分類作業に至るまで、図書館業務のすべての面に直接たずさわって、主任司書としての役割をつとめた。

図書館の仕事、特に分類、目録などの整理業務は、ひとたび、設定した方針、方法で進めると、それを修正、改変することは、多くの時間や労力を要するので、なかなか難しい。新しい図書館づくりは、その初期の基礎づくりや土台固めの良し悪しが、その図書館の将来を決定する鍵である、といってもいい過ぎではない。この点、本学の場合、医学図書館の実務にも経験のある今助教授が、図書館の設立準備の最初から、その基礎づくりに参与し、適切な方針のもとに図書館づくりに努力されたことは、現在、図書館の整備、充実を進める上で、大きなプラスになっている。

II. 図書館の現状

1 図書資料の収集

医科大学図書館を設立するにあたって、最も基本的かつ第一の仕事は、図書資料の収集である。医科大学の新設について文部省の認可をうるためには、一定量の図書資料をそろえることが一つの要件になっているからである。医科大学の設置に必要な図書資料の最低冊数は、文部省の大学設置基準によると、一般教育関係については、

①一般教育科目に関する図書：人文、社会、自然科学の各系列について、それぞれ 1,000 冊以上。合計 3,000 冊以上

②外国語科目に関する図書：一つの外国語について、1,000 冊以上。したがって、英語、ドイツ語、フランス語 3 科目を開講する場合は、合計 3,000 冊以上

③保健体育に関する図書：300 冊以上。

となっている。つまり一般教育関係に必要な図書資料の最低冊数は、外国語の授業科目が 3 ケ国である場合、総括的には 6,300 冊となる。

他方、医学専門科目に関する図書資料の最低必要冊数については、明文化された基準はないようである。これは学部課程の医科大学の新設の場合には適用されていないのかもしれないが、一つの参考になる基準に、大学設置審議会決定の医学、歯学関係大学院設置審査基準要項がある。これによると

①専門図書 30,000 冊以上

②学術雑誌 300 種以上（内半数は外国雑誌）

となっている。この基準はあまりに概括的なので、その解釈が難しい。第一の疑問は、専門図書の意味する範囲である。この基準でいう専門図書は、医学関係の単行書を意味するのか、あるいは医学関係単行書プラス製本雑誌として解釈すべきものであるか、という点である。もし前者を意味するとすれば、これは大変なことである。新設予定の医科大学の図書館が、医学専門の単行書 30,000 冊以上を短期間でそろえるには、かなりの数の複本や、内容的には out-of-date で利用価値がゼロに等しい単行書をも集めなければ、これだけの数をそろえることは困難であるからである。第二は、学術雑誌 300 種以上という規定である。これは、現行医学雑誌 300 種以上を指すのか、それともバック・ナンバーを含めて、医学雑誌 300 種以上を意味するのか、という疑問である。

医学図書館における文献資料の利用の実際から判断すると、この基準が示す専門図書 30,000 冊以上は、単行書プラス製本雑誌 30,000 冊以上として、同じく学術雑誌 300 種以上は、現行学術雑誌 300 種以上と解釈するのがより妥当であると思われる。大学設置審議会の審査基準要項の、このような表現の曖昧さのために、新設予定の医科大学図書館の関係者が頭を痛めるのは、医科大学設置の認可をうるために、医学専門の図書資料は、最低何を、どれだけそろえたらよいかについて、十分な確信をもつことができないことである。

本学における図書資料の収集活動は、一般教育については当然のことながら文部省の大学設置基準を、医学専門については大学設置審議会の基準を、三ヶ年計画で達成する方針ではじめた。そして、その初年度（昭和 46 年度）は、約 1 億 700 万円の図書資料購入費をもって、一般教育関係単行書約 13,000 冊、一般教育関係現行雑誌 44 種、医学専門単行書約 12,000 冊、医学関係現行雑誌

誌 (Annuals を除く) 458 種, 医学雑誌バック・ナンバー 4,300 冊を購入した。

これらの購入図書は, 単行書の場合, 主として本学へ赴任が予定されていた各科の教員が書店などのカタログによって選択し, 医学雑誌については教員予定者の希望および core journals に関する諸種の調査を参考にし, 今助教授が選定した。しかし単行書の場合, 絶版, 品切れなどの理由から入手できなかったものがかなりの数にのぼった。このため, 蔵書の量的な整備をおこなう必要と図書館側を選択する時間の余裕がなかったため, 単行書のこの不足分の補充については, 書店に図書の選択を委ねた。

図書資料の収集を進めるにあたり, 本学が特に恵まれていたことは, ドイツから多数の医学図書の寄贈を受けることができたことである。すでに述べたように, 独協学園とドイツとは古くから密接な関係にあることと, 本学学長石橋長英氏が永年, 国際医学協会理事長として国際的に活躍しておられたことなどの経緯から, 独協医科大学の設立のために, 石橋学長を通じて, ドイツの各界から多くの図書の寄贈があった。例えば, ドイツの出版社 Springer からは, 有名な Handbuch der inneren Medizin 4 版を含む同社出版の新刊医学書約 300 冊が, ドイツのアドルフ・クリング製薬会社社長 G. Klinge 博士からは約 5,000 冊の医学図書および雑誌が寄贈として送られてきた。特に Klinge 博士からの寄贈図書は, 数も多く, 当館の蔵書の整備に大きな役割を果たしていることから, 同博士と石橋学長の好意を記念し, 石橋・クリング文庫と名付けた。さらに, 石橋学長のご尽力により, ドイツにおける学術研究の助成, 援助をつかさどる公的団体の Deutsche Forschungsgemeinschaft から, 新刊医学書約 300 冊の寄贈を受けることになっている。これらのほかにも, ドイツから寄贈された図書は 300 冊以上を数えることができる。

このように当館の図書資料の収集は, 独協学園内外の理解と協力をえて順調に進んでおり, 昭和 47 年 8 月末までに, 一般教育関係の図書資料については大学設置基準の 2 倍を越える冊数を, 医学専門関係のそれは, 大学設置審議会の審査基準の約 70% を収集することができた。

2 図書資料の整理

図書資料の収集とともに, 新設予定の医科大学の図書館にとって最も厄介な問題の一つは, 収集した図書資料の整理業務である。文部省の設置認可をうるために, 多くの医科大学は一度に 2~3 万冊の図書資料を収集する

が, これらの整理作業を含む図書館業務の難しさや特殊性に十分な認識をもって, 最初から専任の専門職員をおくところは稀である。新設予定の医科大学の多くは, 収集した大量の図書資料をまえにして, その整理の難しさや図書館の整備の必要を切実に感じてから, はじめて図書館の専門職員を探しまわる, というのが実状のようである。また, 早くから図書館に専任の職員をおいている大学でも, 一定冊数の図書資料をそろえる必要から, 日常, 購入, 寄贈などで図書館に入ってくる冊数は, 既設の医科大学図書館のそれよりもはるかに多いのにも拘らず, これらを整理するのに十分な数の職員が確保されているところは殆んどない。このため, 整理作業が蔵書の増加に追いつけず, 折角収集した図書資料も未整理図書の滞貨となり, その整理に悩まされている図書館が多いのではないと思われる。

当館もこの点に関しては例外ではない。先に述べたように, 独協学園理事会在医科大学の設置を決議してから図書館の設立準備に着手するまでに 1 年余が経過し, 図書館に専任職員 1 名をおくようになったのは, さらに 9 ヶ月のちのことである。医科大学設置の準備をはじめてから図書館に専任職員をおくまでに, 実に 2 年近くの月日が費されていたことになる。この間, 収集した図書資料の整理業務は, 今助教授を中心に, 独協大学司書科目受講の学生数人がアルバイトとして, これに従事していた。学生アルバイトは, 主として和文図書のカード目録 (基本記入カード 1 枚) の作成と分類作業を, 今助教授はそのチェックの仕事と雑誌や欧文図書の整理など, 整理業務全般を担当していたとのことである。大量の受入図書をかかえて, 今助教授は夏期休暇をも返上して, その整理にあたっていたときいている。しかし, 一般教育関係 14,000 冊, 医学専門関係 14,000 冊にのぼる単行書は 1 年間で整理しうる量をはるかにこえており, 現在も昭和 46 年度に収集した図書資料の整理に追われている。

図書資料の整理方針・方法は, 今助教授が当初に設定した方針・方法を, はぼそのまま踏襲している。

(i) 目録作業 当館における目録作成上の特徴は, 欧文単行書の場合, コンピューター処理による冊子目録を採用している点である。使用コンピューターの機種は, 独協大学電子計算機室にある IBM 1130 (小型) で, 冊子目録作成のためのプログラムは, 同計算機室と今助教授の開発によるものである。この欧文単行書の冊子目録を作成するために図書館が行う作業は, 所定のデータ・シート (第 1 図欧文単行書用データシートを参照)

冊子目録用データシート

独協医科大学

登録番号	74757677787980
請求番号	1234567891011121314151617181920212223242526272829303132333435363738394041424344454647484950
著者名 (共著者を含む)	
書名	
頁数	
出版事項	出版年出版者
双書名	
注記	
件名	

受入種別	受入先	価格	納入年月日	費目	発注番号
注文事項					
追加事項					

51525354

8001

1001

1002

1003

2001

2002

2003

2004

2005

2501

3001

5001

5002

6001

6002

6003

7001

7002

0001

51525354

第 1 図 欧文単行書用データシート

**** AUTHOR CATALOG ****

PAGE 2

CAMPAIGNE, ERNEST ELEMENTARY ORGANIC CHEMISTRY, BY E CAMPAIGNE MARUZEN, PRENTICE-HALL 1962 312P MARUZEN ASIAN ED	437 C186
CHU, DJANG FAR EASTERN GOVERNMENTS AND POLITICS-- CHINA AND JAPAN, BY PAUL M A LINEBARGER, DJANG CHU AND ARDATH W BURKS VAN NOSTRAND 1954 630P (VAN NOSTRAND POLITICAL SCIENCE SER)	312.2 L754
COGEN, CHARLES ECONOMICS IN OUR DEMOCRACY, BY ALBERT N SAYER, CHARLES COGEN AND SIDNEY HANES MCGRAW-HILL 1950 677P	331 S274
COOPER, JOHN N ELEMENTS OF PHYSICS, BY ALPHEUS W SMITH AND JOHN N COOPER. 7 ED KODAKUSHA, MCGRAW-HILL 1964 717P INTERNATIONAL STUDENT ED	420 S642
DAVIDSON, PAUL, SMOLENSKY, E AGGREGATE SUPPLY AND DEMAND ANALYSIS, BY PAUL DAVIDSON AND EUGENE SMOLENSKY, WITH A SECTION ON SOCIAL ACCOUNTS THEORY AND MEASUREMENT, BY CHARLES L LEVEN WEATHERHILL, HARPER 1964 274P HARPER INTERNATIONAL STUDENT REPRINT	331.842 D253
DOBB, MAURICE ON ECONOMIC THEORY AND SOCIALISM-- COLLECTED PAPERS, BY MAURICE DOBB ROUTLEDGE 1965 293P	331.6 D632
DORFMAN, JOSEPH TYPES OF ECONOMIC THEORY-- FROM MERCANTILISM TO INSTITUTIONALISM. VOL. 1, BY WESLEY C MITCHELL. ED BY JOSEPH DORFMAN KELLEY 1967 608P (REPRINTS OF ECONOMIC CLASSICS)	331.2 M682 V1
DUCKHAM, A N FARMING SYSTEMS OF THE WORLD, BY A N DUCKHAM AND G B MASEFIELD PRAEGER 1969 542P	611 D835
FAGEN, RICHARD R ENEMIES IN POLITICS, BY DAVID J FINLAY, OLE R HOLSTI AND RICHARD R FAGEN RAND McNALLY 1967 257P (RAND McNALLY SER IN COMPARATIVE GOVERNMENT AND INTERNATIONAL POLITICS)	319.8 F511
FAKHER, HOSSEIN RELATIONSHIPS AMONG THE PRINCIPAL ORGANS OF THE UNITED NATIONS, BY HOSSEIN FAKHER STAPLES PRESS 1951 200P	329.33 F176

第 2 図 欧文図書著者名目録の実例

へ書誌の事項、請求記号、受入種別(購入・寄贈別)、納入先、価格等を記入するだけである。コンピューターへの入力に必要な、他のあらゆる作業から冊子目録のプリント・アウトに至るまでの、すべての仕事は、独協大学電子計算機室が処理してくれることになっている。コンピューターによって打ちだされる冊子目録の様式は、第2図に示すとおりである。この方法によって作成する目録の種類は、現在のところ、事務用としては図書原簿を、閲覧用として著者名、書名、分類の三種を計画している。

欧文単行書目録のコンピューター化を導入し、現在もこの仕事に関係している今助教授が、「これはあくまでも実験的なものである。」と述べているように、この単行書目録のコンピューター化に関する評価については、まだはじめてから日が浅いので、明確な結論をだすことはできない。そこで、ここでは、コンピューターの利用による冊子目録の作成を続けるに際して、当面、解決しなければならない主な問題点を挙げてみると、

①冊子目録の刊行頻度 これは冊子目録の欠点である加除性の欠如から生ずる一般的な問題であるが、単行書の冊子目録の場合、その刊行頻度はどのぐらいが最も適当であるかということである。逐次的に刊行される冊子目録は、それが新着図書案内、受入図書速報のように、速報性に重点をおくものとしてではなく、図書館の所蔵目録としての機能をもたせる場合には、その刊行頻度が多ければ多いほど、利用の不便や複雑さは増大すると考えられる。個々の冊子目録は図書館の蔵書的一部分、すなわち、増加図書のみしか収録しないので、蔵書全体の中から特定の事柄に関する図書資料を網羅的、組織的に探しだすには、何冊もの冊子目録を調べなければならないからである。他方、その刊行頻度を少くすれば、新しい受入図書に関する情報の提供がおくれる結果になる。冊子目録の刊行頻度をめぐるこの矛盾と、経費、能率、利用等を考慮して、最も妥当な刊行頻度を早急に決める必要がある。

②累積版の刊行とその頻度

③刊行部数 冊子目録のもつ最大の長所は、複製することによって、多くの利用者に配布することができる点である。この長所をいかすためには、複製の問題を考えなければならないが、経費、能率等の面から、④必要部数をコンピューターですべて打ちだす、⑤コンピューターで打ちだしたものを原稿として用い、これをオフセット印刷によって必要部数を複製する、のいずれの方法を

とるかにについても検討しなければならない。

⑤入力の対象となる図書の制限 現在コンピューターで処理する欧文単行書は、英語とドイツ語のものに限っている。フランス語の Accent aigu, Accent grave, Accent circonflex, Trema のような符号を伴う文字を用いる言語の図書は保留している。これは独協大学電子計算機室に、この種の文字を処理する機器が、まだ用意されていないという特殊事情のためである。

和文の単行書の目録は、伝統的なカード目録を採用している。適用する目録規則は NCR 1965 年版である。作成するカード目録の種類は、事務用としてシェルフ・リスト、閲覧用としては著者名、書名、分類の三種であるが図書館の内部体制が整った段階で、件名目録も用意する計画である。シェルフ・リストとして用いる基本記入カードは手書きで作成し、閲覧用の目録は、この基本カードを原稿にして、すべてゼロックスで複製している。

(ii) 分類 当館で採用している分類表は、NLM 分類表、LC 分類表、および NDC の3種である。LC 分類表は、NLM 分類表には包含されていない。医学、生物学関係の主題の図書に適用しているが、両者の分類体系は相互補完の関係にあるので、実質上は NLM 分類表と NDC の二本立てであることができる。

当館が3種の分類表を採用しなければならなかったのには、特別の事情がある。筆者の想像するところでは、当初、医学専門図書については NLM 分類表を、医学以外の分野の図書についてはすべて LC の分類表を使用の方針であったと思われる。医学、生物学分野の図書の分類には難のある NDC を避けて、医学専門の分類表である NLM 分類表を採用することになれば、この組合せが最も自然であり、かつ妥当であると考ええるからである。しかし、LC 分類表による分類作業は、NDC のそれに比べるとはるかに能率が落ちる。LC 分類表を使いこなすには、当然のことながらその構成や使用法に精通していることは勿論のこと、その分類用語を十分に理解する英語の知識が要求されるので、一般の司書が LC 分類表の使用に習熟するまでには、かなりの月日を要するからである。当館の場合、大量の図書をかかえ、その整理業務の遅滞をさけるために、能率的かつ迅速な整理が優先し、結局、3種の分類表を採用せざるをえなかったというのが事実であると思われる。

しかし、当館のこの分類方針に決定的な誤りや利用上の不便はないものと判断している。逆説的には、この分類方針をとることによって、医学、生物学分野の専門関

係図書と主題領域が広範多岐にわたる一般教育関係の図書が、分類記号の違いによって機械的に二分され、配架上もその区別が簡単にでききるので、利用者にとっては、関連領域の図書へのアプローチが容易になるともいえる。

3 職員

図書資料の収集、整理とともに、医科大学図書館を設立する際に重要なことは、有能な専任の職員の確保である。既設の医科大学図書館とは異なり、設立途上にある医科大学図書館の場合、その主要な仕事は、図書資料の収集、受入、目録、分類などの整理業務であるため、特に医学図書の整理面に精通した職員が必要とされる。しかし、本学の場合、都会から離れているという地理的条件の不利のため、医学図書館の整理業務経験者はおろか、医学図書の整理業務をこなす能力、またはその可能性をもつ一般の司書有資格者を獲得することさえ困難である。

当館の館員数は、現在、専任 5 名、非常勤 1 名である。その全員が司書有資格者で、2 名を除いてはいずれも、医学図書館または工学図書館の経験者である。本年 4 月の開校までに、図書館経験者 3 名の増員を計画し、

各所に求人依頼しているが、適当な人をうることはなかなか難しい。因みに当館が専任職員をはじめて採用した、昭和 47 年 3 月以降、現在までの職員補充状況をみると次の通りである。

採用年月	採用数	図書館経験	館員総数
47. 3	1	医図 8 年	1
47. 4	2	大学新卒	3
47. 6	1	医図 13 年	4
47. 10	1	短大新卒	5
47. 10	*-1	大学新卒	4
47. 11	**1	医図 4 年	5
48. 1	1	工図 11 年	6

*退職 **非常勤

4 施設、設備

本学が図書館の設立準備に着手した当時は、校舎などの建物は建設工事の最中で、利用できる完成した建物が一つもなかったため、図書館は独協大学図書館の書庫の一部を借用し、そこですべての業務を行っていた。この間に、図書館の建築計画については学内でいくらか検討されてはいたが、大学全体が設置認可をうるための諸準備に追われていたこともあり、殆んど進展がみられなかった。

その後、急ピッチで建築工事が進められていた建物のうち、主に学生の授業に使用する校舎棟が完成すると、独立の図書館の建物ができあがるまでの暫定措置として、この校舎棟の一隅に臨時的図書館を設けることになった。これは、ゼミナール室に予定していた室を改造したものである。昭和 47 年 8 月、独協大学図書館での 1 年余にわたる仮住いから、図書館はこの臨時に設けられたところへ移転し、現在に至っている。

この臨時の図書館の占有面積は、1 階 270 m²、2 階 216 m²、計 486 m² で、館内の配置は第 3 図に示す通りである。これは、図書館用として設計された室ではないので、機能、スペース、建物の強度、特に床部分の耐重量などの面で、図書館として使用するには無理な点が多い。特にスペースの不足は深刻で、今後増加する図書資料を配架するだけのスペースの余裕は、すでにみあたらない状態である。このため、図書資料の収容能力を増やすことを目的に、館内の大幅な配置変更の検討をはじめたが、その結論がでたので、近々、館内の模様替えを行う予定である。

閲覧机、椅子、カウンター等の家具類についても、図

第 3 図 図書館配置図

書館としての外観を整える必要から、臨時に一般事務所用のものを置いている。そのほとんどは、図書館で使用するためには、寸法、規格、使い易さ等の面で難点がある。新しい図書館の建物が完成したときには、現在使用している、これらの家具類は他へ転用し、図書館専用の家具を新たに購入する計画である。

図書館の新築計画は、昭和49年3月竣工を目標に、その設計を進めているが、これについては後述する。

III. 当面の課題

以上が当館の設立の経過と現状の概要であるが、現在、その整備、充実を進める上から直面している問題のいくつかをとりあげ、これに対する当館の考え方や解決策を簡単に記してみたい。

1 組織、機構の整備

組織、機構のあり方については、当館内部および図書委員会で検討し、独自の立場から一つの案をまとめた。この案によると、昭和48年4月1日の開校時における当館の組織図は第4図に示す通りである。しかし、大学全体の組織、機構はまだ定まっていないので、学内他部局との関連から、図書館側の案がこのままの形で正式に認められ、実施に移されるか、についてはわからない。

当館の組織・機構づくりは、次のような構想で進めていきたいと考えている。

①図書館長の閑職化を排除するために、図書館長の権限および責任を明確にすること。このために図書館運営の重要事項を審議する図書館委員会は、図書館の意志決定機関とはせず、あくまでも図書館長の諮問機関とする。また、図書館長は、学長または副学長に対して、本学の研究・教育活動をサポートするために行う、図書資料の収集、管理、運用に関する全責任を負うことを明確にする。

②図書館運営の重要事項の審議に、図書館専門職員が参加できるようにするために、副館長(主任司書)は図書館委員会の正式メンバーとすること。

③図書館に関する常設の委員会は、図書館運営の大綱、方針などの重要事項を審議する図書館委員会だけとすること。

④本年4月の開校時における館務分掌は、館員数、館員の経験および年令など、館員構成の現状を考慮して、係単位で出発すること。ただし、開校後、年月の経過とともに図書館利用者の増大、図書館サービスの拡大と充実、館員数の増加が当然予想されるので、6年後の完成

年度には課単位の館務分掌への切換えを考える。

⑤図書館長の専任制は、現在の学内事情では図書館にとって得策とはいえないので、将来の課題とすること。

他方、図書館業務の特殊性と図書館職員の専門性を強くうちだすために、図書館では一般事務系の組織、機構にみられる、課・係の形をとらず、司書、司書補などの専門職種の名称を職名として採用し、これを軸にした組織・機構をつくる、という案もある。この案による組織図は第5図に示す通りである。この考え方の論拠は、①図書館は職員規模が小さいことから、一般事務系部局に比べて設置される職制の数が限られるので、図書館職員が、昇進、昇給、格付等において一般事務職員よりも不利になることを防ぐため、専門職としての性格を組織・機構面にもりこむほうがよい、②図書館職員の専門性がうちだされるので、図書館職員は専門職としての自覚、誇り、責任感をより多くもつことができるであろう、の二点にある。

このような組織、機構にした場合、図書館職員の専門性をうちだすと同時に、専門職としての特別な待遇を確保する上では有効であるかもしれないが、他方、司書対司書補、司書補対一般職員の形で、職種の区別が身分上の上下関係に結びつく懸念が多分にあり、職員数の少ない図書館の人間関係を維持する上からは好ましいことで

第4図 図書館組織図案(I)

第5図 図書館組織図案(II)

はない、という意見もある。

組織、機構に関して最終的な結論をうるまでには、さらに細かい検討が必要であり、かなりの時間がかかるものと思われる。

2 新図書館の建築計画

大学当局の校舎等の建設計画によると、図書館については、当面、現在の施設を利用し、開校1年後、つまり昭和49年3月末に独立専用の建物を完成させる予定である。この建物の規模は、3階建、延床面積約3,000 m²、図書収容能力15万冊である。ただし、最初は2階建、約2,000 m²の建物を建て、以後、蔵書や利用者等の増加によるスペースの狭隘化の度合によって、概ね5、6年のうちに、3階1,000 m²を増築する計画である。

新図書館の設計については、図書館側と本学校舎等の建築請負会社である大林組の設計担当者間で、本格的な協議、検討をはじめたところである。設計を進めるについて、特に我々が重視していることは、図書館の意見希望がその設計に十分に反映されるようにするために、図書館側と設計担当者が密接な連携をたもつことである。新しい図書館の設計をはじめるとあたって、図書館側が設計担当者に提示した基本的な構想は、

①完全開架を採用すること。閲覧部分と書庫部分を物理的に区分することはできる限り避け、図書資料を収納する書架群と図書資料を利用する閲覧席は、できる限り近接させて、両者の接触面を広くとる。

②モデューラー・プランニングを採用すること。多くの医学図書館の経験から、将来、医学図書館活動の質的变化や蔵書の著しい増大などに伴ない、スペースの利用や室割りの大幅な変更、改変を必要とすることは確実に予定できる。このため、スペースの利用に融通性をもたせるために、モジュールを基準にして配置や間仕切りを考えるとともに、構造壁による間仕切りは、建築上支障のない限り少くする。

③閲覧部分は、教員、研究者と学生といった利用者の身分で区別しないこと。閲覧部分は図書資料の種類、つまり、雑誌、索引・抄録誌、参考図書、単行書ということとで区別する。

④全館冷暖房完備とすること。

⑤館員の常駐場所はメイン・フロアにまとめ、レファレンスを除いては、あらゆる直接サービスの提供部門は1ヶ所に集約すること。これは、職員数が少ないので、職員の不経済な分散配置を避けるためである。

第1表 図書資料整備三ヶ年計画(案)

項 目	昭和47年度		昭和48年度		昭和49年度		備 考
	冊(種類)数	予算額	冊(種類)数	予算額	冊(種類)数	予算額	
新刊外国雑誌	370(種)	8,400,000	545(種)	13,160,000	565(種)	15,540,000	一般教育関係10種を含む。昭和47年度を基準に、年間自然増15%で算出
新刊国内雑誌	160(種)	720,000	260(種)	1,380,000	320(種)	1,840,000	一般教育関係昭和47年度34種、昭和48年～49年度75種、年間自然増7%
医学雑誌バック・ナンバー	3,500(冊)	30,000,000	3,500(冊)	30,000,000	3,500(冊)	30,000,000	昭和47～49年度 医学雑誌バック・ナンバー整備3ヶ年計画
二次資料バック・ナンバー	100(冊)	4,576,000	200(冊)	6,000,000	——	——	昭和47年度C.A., B.A., Index Catalogue 昭和48年度E.M., Zbl.類, Dentistry関係
一般教育図書	1,000(冊)	2,500,000	2,000(冊)	5,000,000	2,000(冊)	5,000,000	@ 2,500円
医学専門図書	1,500(冊)	12,000,000	1,500(冊)	12,000,000	2,000(冊)	16,000,000	@ 8,000円
参考図書	400(冊)	3,000,000	400(冊)	3,000,000	200(冊)	1,500,000	事典、データ・ブック、要覧等 @ 7,500円
看護学校関係図書	——	——	400(冊)	1,000,000	100(冊)	250,000	看護学校開設準備 @ 2,500円
合 計	530(種) 6,500(冊)	61,196,000	805(種) 8,000(冊)	71,540,000	885(種) 7,800(冊)	70,130,000	202,866,000

以上の構想に基づいて、現在、設計担当者が設計図を作成している。この設計図を材料に、今後、図書館側と設計担当者が協議を進め、必要な修正をおこないつつ、本年6月までに、完全な設計図をつくりあげるになっている。

3 職員の確保

すでに述べたように、本年4月の開校時までに3名の増員を図るべく、多方面に図書館経験者の求人依頼しているが、本学の地理的条件の悪さが障害になり、適当な職員を確保することは非常に難しい。このため、慶応大学図書館学科、図書館短大、東洋大学図書館学科へも新卒者の求人について打診したが、これらの大学から応募者を獲得することさえも悲観的である。昭和49年4月に新図書館が完成し、本格的な図書館活動をはじめていくためには、最低13名の職員が必要であるとみている。それにはさらに4名の増員を図らなければならないが、現在の求人難から察すると、その確保は、一層困難を伴うことになるであろう。職員確保の困難は、当館にとっては、最も深刻な問題になっている。

4 図書資料の収集、整備と整理業務の円滑化

当館の図書資料の収集、整備の状況は、すでに述べたとおり、蔵書全般をみると、医学関係の専門図書が不足している。大学設置審議会の医学、歯学関係大学院審査基準要項および日本医学図書館協会の入会加盟基準と比較すると、前者に対しては約9,000冊、後者に対しては約11,000冊の医学専門図書がまだ不足である。このような現状から、大学設置審議会の基準の達成を図ることは勿論のこと、医学図書館間の相互協力活動への参加資格をうるために、日本医学図書館協会加盟の早期実現を目標においた、図書資料整備三ヶ年計画をたてた。(第1表図書資料整備三ヶ年計画を参照)

この計画の特徴の一つは、雑誌のバック・ナンバーが著しく不備であることから、その整備、充実に重点をおいていることである。昭和47年度以後3ヶ年間に、予算9,000万円をもって、購入中の現行外国雑誌545種(Annualsを除く)および現行国内雑誌260種のすべてについて、1960年以後のバック・ナンバーを完全にそろえる計画である。1959年以前のバック・ナンバーについては、特に利用度の高い、重要な雑誌に限り、マイクロ・フィルム版またはオリジナルで徐々に補充していく方針である。また、代表的な二次資料のバック・ナンバーおよび参考図書の補充に関しても、独立の予算項目をもうけて、その整備には特別の注意をはらっている。昭和

47年度図書資料の収集、整備は、この整備計画に基づいておこなわれており、新刊雑誌については、同様に昭和48年分の発注がすでになされている。

この図書資料整備三ヶ年計画は、大学当局に対する予算要求の資料として作成したもので、予算額の算出にあたっては、若干の余裕をもたせてある。したがって、ここに示された予算額で購入しうる冊数は、計画のそれよりもかなり増えるものと推測している。昭和48年度においても、この図書資料整備計画にかかげた予算額が全面的に認められると、昭和49年3月末までに、大学設置審議会および日本医学図書館協会加盟資格の両基準をみたすだけの図書資料は、収集、整備できるのではないかと考えている。

図書資料の収集活動は順調に進んでいるが、反面、これに伴う整理業務の増大が問題になっている。当館の場合、前述の図書資料整備計画をそのまま実施に移すと、年間増加冊数は、単行書のみで、4,000冊を数える。寄贈図書を加えれば、この数はさらに増えることになる。図書資料の急増および当館の整理能力の限界によって生ずる未整理図書の増加を、どのようにして最小限におさえ、整理業務の円滑化を図るかは、当館の重要課題の一つである。

5 サービス

図書館の究極の目的である、利用者に対するサービスの提供については、当館の人的、財政的条件の許す限り、積極的にとりくんでいく方針である。特に、コンテンツ・サービス、文献調査サービス、Index Medicusの利用によるSDIなど、他の多くの医学図書館が実際に行ない、効果をあげているサービスの提供については、図書館利用者の需要や反応を検討しつつ、実施の方向で計画していく。勿論、これらのサービスに限ることなく、個々の利用者が文献や文献情報を探索、入手、利用する上での障害や問題に対しては、文献および文献情報をつかさどる学内唯一の専門機関としての立場から、前向きな姿勢で解決策を検討し、積極的に援助を与えていきたいと考えている。

しかし、当館が医学図書館として、本格的な活動をはじめるのは、3、4年後のことになるであろう。開校後2年間は教職員や学生数が少ないので、図書館の利用や図書館に対する要求は、きわめて限られたものであろうし、他方、図書館側も、この間に図書資料、施設、職員などを整備し、図書館活動を発展させるための基盤を固める時間的余裕を必要とするからである。

サービス面に関する、当館の特色の一つは、その利用を、本学教職員、学生に限ることなく、地域の病院医師、開業医、薬剤師など、学外の医療関係者にも広く開放する方針をうちだしていることである。本学は、その設立の基本的理念に、地域の医療関係者との緊密な連携による医療センターとしての役割をうたっているが、本学のこの理念をうけて、当館が地域の医学文献センターとしての役割を果たすべく、期待されているのは当然であるといえる。

当館の利用に関する諸規則については、案文はすでにできあがっているが、これはまだ学内の承認をうけるに至っていない。この案文によると、当館の開館時間は、平日 9 時～20 時、土曜日 9 時～15 時、貸出図書冊数および期間は、1 人 3 冊以内で 1 週間（ただし到着後 1 ヶ月以内の新着雑誌はオーバーナイト・ローン）である。これらの問題は、他の医科大学図書館の実状を参考にして、本年 4 月の開校時までには解決したいと考えている。

お わ り に

新設医科大学、特に私立大学における図書館づくりは、その大学の経営方針や上層部の図書館に対する理解・認識の度合によって左右されるので、各大学に共通する図書館づくりの妙薬というものはない。図書館づくりの方法、進め方やこれに伴う問題は、学内諸条件の違いから、大学によってさまざまである。

しかし、新しい医科大学の図書館を設立する場合、各大学に共通する最も基本的な要件は、その大学の設立準備の当初から、図書館の専門職員、特に医学図書館の経験者がこれにあたることであろう。新しい図書館づくりは最初が肝要である。図書資料の選択、収集における、ちょっとした誤りや失敗による損失は、以後の整理、保管、利用に至るまでに費される経費や労力の無駄を加算すると、非常に大きなものになる。整理業務においても、適切で一貫性ある整理方針が欠如すると、将来、分類、目録の大幅な変更、修正が必要になり、図書館業務の円滑な遂行や図書館活動の発展を妨げる結果を招くことになりかねない。医科大学図書館は、蔵書構成、整理業務、活動面、利用のされ方などにおいて、他の大学図書館や公共図書館とは非常に異なるので、このような事態を避けるためにも、医科大学図書館の性格や特殊性を理解している専門の職員が、最初から図書館づくりにあたることに特に必要である。

幸にも当館の場合は、医学図書館の経験を有する今助教教授が、直接、その基礎づくりにたずさわったので、医学図書館として発展するための土台は固まっている。この土台の上に、いかにして骨組みをつくり、肉づけをしていくかが、これからの仕事である。当館が、他の医科大学図書館のレベルにまで成長するまでの道程は長い、学内外のご協力を賜わり、立派な医学図書館をつくり上げていきたいと考えている。（昭和 48 年 3 月 8 日受付）

*

*

*